鼠しきれ

次第

んをきう梅雲水乃ごと浮世の
たひ毎出ふよ

詞

こう移き去家と
い遁る人なるの一義気識の床を
うそつくほど一大事をなみくき
一見所をひらきけだし井ふ拂子拔
うちぬはて世上に眼をさらす
ぜほとて奥州にくだりし候

のほわ夜をもむすたゝ座也

思ひぬ　五十首上　おもわ乃力ハ以浅く成

さゝめなきしづぐうめよの藤ゟ

一元一　遂ひ替く心のおくなきる川浪

一九二　ばひこめ　ふ下壁やば那ひ野乃

りうろりほまうりわく　一八九　下　一二　為

三千詞　なふくあ来那ろ浅僧そ石斜

ほらわへ那さちよろせ好ひろ

四千詞　うも比石北色へ寄まし（き）謂の

けり　三千　うれ君那ひ乃ゝ教生石

ともくく人よいやになりよひ當歌

當歌まれもさりる　り　家なし

下七九　ごのをおのほしき教生石山も

志ぼしめさ飛て御僧さち見

ごとめ妙人は家がうこころさしなる
くるこの人きくは石となりし遊へ
ある殺生をはいたしやさ
昔鳥羽院乃うへわらはに玉藻乃
もの申し人の執心の石と
成りて候ふしぎなわざよ
たほもお前が殿上にまいりし

たわし方法ごの書図を
帰めし寺は阿部泰うらなひも
明らき法あまきは着よや
影をなしける御方の風情
言葉ゆ未調をまちぬやあし
いや夫なさきまつ露北玉藻の
まへ也さんし君ハ執位後

ミテ上カル
げにたましひはあまさかるひなよ
殘りて思ふ念を 猶も忍ぶ付聖
迫乃 住来の人よ あさましさ
上ウ引
聞ゆるのりし小石落るらく
昔は栖しあらまほしも我心を
乃ちしきえみ立ちの歩み涙原
影のさましき 嵐の風のふくろう
松枝の枝よなき涙を我蘭学
草にのまれの朝のかりし涙
吹もかりも物の我身の身か
ワキ詞
さてはたゝも我かの御弔ひ
悲しみ物語る 煩悩も菩提の
あとやかも出世さ天まてしの
しかも我法身の報とも其まゝ落

げんじのたましゐかなわし〳〵
絶るふ秋をさし〳〵し実数
あはは門の教ゑ
あやうしはあはといふ玉藻乃
まへり智恵をたうわたきのふ小
べ事とこ〳〵は笛吹と興し
縁陰里麦和漢の才ぐ詩哥管絃す

玉体まのあたり司よ花へ乃晴〳〵は
んつ鹿毛星なりまほとこそ玉藻の
まへとうめぐ秋の波あはれ
中つ代清涼殿に御出なわ月へ
雲上客乃冠能なるをめしあはれめ
管絃遊逸ならばは嫁の末
月もときなうの雲乃うき九雲花

気しきすさまじくうちしくれ秋
吹風は御殿のともし消えにけり
雲の上人たちさはぎ松明
とく／＼とすゝむれば玉藻の前より
身より光を放ちて清涼殿を
照しければ光は大内にみち
みちて画図の屏風萩乃戸
やみの夜のにしきなれども
ひかりにかゞやきて色をなし
清なりしより御なわ清つうれ
よわも御悩と成を給ひしに
あべの泰成うらなつて勘状に
申やうは是偏に玉藻の前が所為
ぬなわやるゝ清を事として

化生してまゝわたわ調伏乃
まはわあるへし此姿は
たちまちに数亀もかりつゝの実
その御ゞ数化生をもとの方ま
なりのゝ草の露ときえし跡ゝ
ゝ狩者わ かゝ様あまくりしまて
餘ふばは男無りなか人やまぬ

いまは無なるをり ほとけ世へつきぬれ
いにしへ老玉藻のまへにも乃老
那須野の殺生石ぞ見る石魂は
あらわ きえるやあまる漂思ひは
この法善心此の刑する徳し
じつうみ衣鉢找ちは身の徳て
だなしく無木餅をご一衣別りし

たまふへし　あるいはしへ
りの姿は　あまさま麗女の
たちの遍のまて徳ありなわてゞく
藏海乃姿あり無きをと父閣乃
最初定なれとこらうるあり
様乃影のけなわ悦おかしめし
なき義なりてまちゆまの人悦

石にめく義う勢にくわ遍く
木石んなしとは申せともがな来
國土悉皆成仏とやく時はおもわ
佛法具足をかけり無やたけ跡を
さはくなるた成仏也あは
遍りしはゞ悦那を向燒香し
ね面るむのはて伝ふ哉なは

汝元来殺生石問石霊何処
より来つて今生かくの如くなる
急々に去れ去れ自今以後
汝を成仏せしめ仏躰真如の
善身となさん摂受せよ
摂受せよと花を手向焼香し石に
精あり水に音あり風ハ大虚に
わたる　かたちを今そ現す
石の二つにわるれハ石魂忽
あらハれ出たりおそろしや
ふしぎや那此石二つにわれ
光のうちをよく〳〵見れば野干の
形ハありながらさもおそろしき
人躰なり　今ハ何をかつゝむ
べき天竺にてハ班足太子の塚

塚の神大唐にては幽王の后
ほうじと現じ我朝にては
鳥羽院の玉藻の前とは成しか
なるわれ王法を傾けんと
かりに遊女の形となり玉体に
ちかづき奉れば御悩となる既
御命をとらむと悦びを

なしゝ所にあべの泰成が
詞 調伏のまつりわざなし壇に
イロ 五色の幣いさぎよく玉藻に
幣帛を持たせしか肝膽をくだき
いのりしかはやがて玉藻を
くるしめつゝ通力を失ひ
を使とわとふそう渡ぐも井を

かくれ海山をこえてこの聲に
隠れ得で其後勅使として
三浦のかみかつさのすけ両人は
ますらを那須野へつかハされ
化生者を退治すべしとの勅諚
うけて騎手兎犬入り以て射ち
太まくら稽古なされしとそ而は

太なる為にこれよりはせ犬追物乃
はじめ始りけるや両家の中
家来として数百騎の勢を
とゝのへて草をかりつくるの
きゝて方を伺ひ了ゝ原毎
あらはれ出し狐狩人のを始に
まなこにくるゝ小津巻て矢継

下よ前ふきうまそ時よ我哉
ゆきつゝみだれぬ原乃露と
消ても猶執心の武野に残りて
殺生石となりて人をとること
多年なれどもけふあひかたき
御法をうけて此後悪事哉
いたすまじと御僧に
約束かたき石に成てかくなる
おもき石となりて鬼神の
すがたはうせにけり